

聴覚障害者へのソーシャルワークにおける専門性研究 - ろう文化視点に基づく支援をめざして - [全文の要約]

著者	原 順子
発行年	2014-03-31
学位授与機関	関西大学
学位授与番号	34416甲第516号
URL	http://doi.org/10.32286/00000181

論文の要約：研究課題と構成

1. 研究の目的

本研究では、聴覚障害者の生活上の諸問題に関わる相談支援（以下、聴覚障害ソーシャルワーク）における専門性に着目し、クライアントである聴覚障害者と、彼らを対象に相談支援をおこなうソーシャルワーカー（以下、聴覚障害ソーシャルワーカー）を研究対象とした。

研究の目的は、以下の3点を論考・検証し、聴覚障害者の特性を踏まえた聴覚障害ソーシャルワークの専門性を実証的に分析することである。

- (1) ソーシャルワーク実践の枠組みが存在すること
- (2) 聴覚障害ソーシャルワーカーには、本来、ソーシャルワーカーとして必須であるジェネラルな技能の他に、聴覚障害に関する独自のスペシフィックな技能が必要不可欠であること
- (3) 聴覚障害ソーシャルワークには、多数派である聴者の聴文化に対して、少数派である聴覚障害者の〈ろう文化〉に関する視点が不可欠であり、それを基盤とする支援として「文化モデルアプローチ」が構築されうること

2. 研究の方法

研究の目的（1）については、調査分析①として、聴覚障害ソーシャルワーカーを対象にインタビュー調査を実施し、収集したデータをM-GTA（修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ）を用いて分析をおこない、聴覚障害ソーシャルワークの理論的枠組みを生成した。

研究の目的（2）については、聴覚障害ソーシャルワーカーのスペシフィックな技能を検証するために、調査分析②として、調査分析①と同じく聴覚障害ソーシャルワーカーを対象にインタビュー調査を実施し、ソーシャルワーカーとして必要な資質や知識・技術等のコンピテンスをKJ法により生成した。そして、生成されたコンピテンスについて、クライアントの文化的背景に着目することでは共通点のある異文化間ソーシャルワークや、聴覚障害ソーシャルワークに関する先行研究との比較をおこない、聴覚障害ソーシャルワーカーの独自の専門性を抽出した。

研究の目的（3）については、聴覚障害ソーシャルワーカーの就労支援に関する報告書を文献調査し、本研究の調査結果から見えてきた〈ろう文化〉視点に基づく支援アプローチとして、「文化モデルアプローチ」の有効性について検討を加えた。

3. 本研究の構成

第1章は本研究の研究課題と構成について説明した。

第2章と第3章では、聴覚障害ソーシャルワークの重要な構成要素である「クライアントとしての聴覚障害者」と「相談援助専門職であるソーシャルワーカー」について、先行研究をふまえて論じた。

まず第2章では、聴覚障害者とはどのような人たちなのか、その実態について説明し、彼らがおかれている社会的状況を概説している。そして、聴覚障害者が歴史的にどのよ

うな存在として人びとのまなざしが向けられていたのか、その障害者観の変遷について先行研究をもとに論じた。加えて、本研究の重要な視点である、ろう文化に関する先行研究についてもレビューし、構成要素を明らかにした。

第3章では、援助者としてのソーシャルワーカーに関して、特に聴覚障害者への相談援助をおこなっているソーシャルワーカーの歴史と現状について説明した。そして、ソーシャルワーカーの専門性のなかで、本研究で明らかにするスペシフィックな専門性のとらえ方を論じることで、本研究での筆者の研究スタンスを明確にした。

第4章では、聴覚障害者を対象に相談援助をおこなっているソーシャルワーカーにインタビュー調査を実施し、その結果から、聴覚障害ソーシャルワークの枠組みを生成し（調査分析①）、聴覚障害ソーシャルワークの枠組みからみたスペシフィックな専門性を明確にした。

次に、第5章では、ソーシャルワーカーのコンピテンスをもとに考察を展開した。まずコンピテンスの定義について考察し、そして、ろう文化への理解が求められるという点では聴覚障害ソーシャルワークと共通点をもつであろう、異文化間ソーシャルワークのカルチュラル・コンピテンスと、聴覚障害ソーシャルワーカーのコンピテンスに関する先行研究のレビューをおこなった。

第6章では、聴覚障害ソーシャルワーカーのコンピテンスを質的調査により生成した。第4章の（調査分析①）を継続したインタビュー調査結果から、聴覚障害ソーシャルワーカーのコンピテンスを抽出し、分析する（調査分析②）ことにより、聴覚障害ソーシャルワーカーのコンピテンス概念図を作成した。

第7章では、第6章で生成した聴覚障害ソーシャルワーカーのコンピテンスについて、第5章で示した先行研究との比較をおこなった。それらの共通点および相違点から、本調査研究の妥当性を考察した。そして、聴覚障害ソーシャルワーカーには、ろう文化に視点をおいた援助が重要であることを明らかにした。具体的には、聴覚障害者を対象とする就労支援従事者の言説をもとに、ろう文化視点による介入の重要性を明らかにし、聴覚障害ソーシャルワークにおける文化モデルアプローチの提言をおこなった。

第8章は本研究のまとめであり、聴覚障害者への相談援助におけるスペシフィックな専門性についての要約と結論、本研究の意義と限界、そして今後の課題を述べている。

4. 研究結果

以下の3点の研究結果が明らかとなった。

- (1) 聴覚障害者のクライアントは、多数派の聴者社会の中ではマイノリティであり、その実態は多様であるために理解されにくい存在である。それゆえに聴覚障害ソーシャルワーカーには、聴覚障害に関する知識やコミュニケーション技術といった独自の専門性が必要である。そしてクライアントへの支援目標は個々のニーズ解決であるが、それらは総じて、多数派の聴者社会と少数派のろう者社会との関係性において生じる、さまざまな生活上の諸問題の解決といった関係性の改善である、との援助実践における枠組みが形成された。
- (2) 聴覚障害ソーシャルワーカーのコンピテンスは、ソーシャルワーカーに必要な一般的なコンピテンスに加えて、下記に示す7つの独自のコンピテンスが生成

された。これらのコンピテンスを有する聴覚障害ソーシャルワーカーがクライアントの相談支援を効果的にこなうことが確認できた。

- ① 多様な存在である聴覚障害者の理解
- ② クライアントに応じたコミュニケーション・スキル
- ③ 幅広い相談内容への対応力
- ④ 聴覚障害者のための制度に関する知識
- ⑤ 聴覚障害者のための社会資源に関する知識
- ⑥ I T機器の活用術
- ⑦ 聴覚障害に関するアドボカシー

(3) <ろう文化>に着目した「文化モデルアプローチ」は、聴覚障害ソーシャルワークにおいて有効な支援アプローチであることが示唆された。

以上の3つの研究結果から見出された事象は、聴覚障害ソーシャルワークの独自の専門性を示すものである。